

私の原風景

美術部 松井敦子

裏日本の城下町の家並は暗く、ひんやりと黒い影を落として、日差しは黄ばんで見えた。黄ばんだ朝日が縞模様となって視界をよぎる、その黒い影の下を、毎朝、学校へと急いだ。夏になると何もかも、木陰までが、黄ばんで暑苦しい。冬は一転して、すべてが重苦しいグレー一色となった。

小学4年になって東京に戻ると、空は真っ青、空気は透明、どこまでも澄みきっている。野辺の草花も淡く香りを漂わせる。

東京では雨の日まで明るい。

歩道も、車も、家も、町全体が雨に濡れてキラキラと輝いている。

特に、歩道にたまった落ち葉が、濡れて色が蘇り、絵具を流したように見えるときは、美しさに感動して立ち止まっていた。

多感な幼少期を裏日本と表日本に過ごすことで、地理的要因、気候（特に温度、湿度、香り）背景などの変化による・光・影・空気・等の変化に興味深く体験していたと思う。

退職後、絵を始めて間もなくであるが、夜明け前の薄暗い台所の白壁に、北窓から光がさしているのに気がついた。

日の出までの短い時間に白壁は、薄紫色から黄色、ピンク色、オレンジ色と変化し、日の出が近づくにつれて光は強くなり影は濃くなってゆく。

日の出と共に台所は白一色に戻る。

北側の隣地は300坪ほどの雑木林で、日が昇れば緑一色の木々に囲まれた台所となった。四季折々の光と色の変化は興味深く、朝日や夕日の斜光は、白一色の台所を変身させる。

この変化するさまと私の心の移ろいを、当分の間、描いてみたいと思った。

早朝、暗闇に50号のキャンバスをたてた。

薄暗い北窓は冷氣の中に春の香を漂わせて、日の出前の光を西側の壁の一点に集めている。

不思議だ。

三月の青白い北窓にはうっすらと、黄緑の陰が映り、壁に映った影は、くっきりと濃く薄紫、黄色、ピンク、オレンジと変化する。

あたりには凜とした透明な空気が漂っている。ガスレンジの辺りは、暗闇ではっきりと見えない。その色は黒でもなく、青でもなく、茶でもなく、柔らかい不思議な不透明色だ。

私は、小宇宙を見て感動した。

これからこのモチーフを、何枚も描いてゆこうと決めた。

そして何枚か描いたところで隣人は、突如として、樹をすべて切り倒して、更地にしてしまった。北窓には、白いアパートが立ちふさがり、一日中、白い光をギラギラ

と放っている。

私の密かな楽しみも消えてしまった。

共に絵を学んだ友人も、未だに「あの絵は良かった」と言う。

あの不思議な感動を、起こさせるモチーフとの出会いが、無くなって目標を失った。

光と影の画家と言われる人は多いが、私はカラヴァッジョに興味を持っている。

ローマのサン・ルイージ・ディ・フランチェージ聖堂内のコンタレッリ礼拝堂の暗闇にひっそりと掲げられた3枚の聖マタイの祭壇画で「聖マタイの召命」と「聖マタイと天使」を見て本当に驚かされた。

作者はいろいろと物議を醸した人物でもあり、特に「聖マタイと天使」は神聖を汚すからと教会に拒否されて、描き直した作品だが「聖マタイの召命」同様に、ただの世俗画にしか見えない。

これが祭壇画なのだろうか？しかしながら、どちらも、その場面を切り取ったかのように臨場感に溢れて、なんと生き生きとしていることか。

私は絵に見入ってしまった。

そして、主イエスを除けば弟子たちも普通の人間なのだから、なるほど、こんな怪しげな商人風だったかもしれないと思わせる。

そう思わされて感動して、しばらくたたずんでいた。

素晴らしい強烈で神秘的な光が、この絵を宗教画にしてしまった。

素晴らしいリアリズム。

当面の目標を失ったままの私ではあるが、人物でも、静物でも、風景でも、それに対する光と影による時の移ろい、それを見ている私の思いを、普通の具象で表現したいと思っている。

カラヴァッジョの「聖マタイの召命」の弟子たちに、あたる劇的な光に勇気をもたらしたが、それに少しでもあやかって私の絵にも光が当たり、何かを浮かび上がらせた。

私のように淡い色調を使用して、如何に迫力が出せるものか、を当面の課題として考えている。

2021年6月記

サン・ルイージ・ディ・フランチェージ聖堂内のコンタレッリ礼拝堂

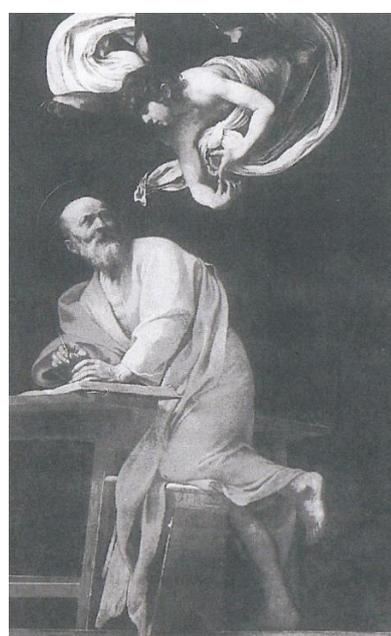


コンタレッリ礼拝堂のマトイ 3 部作

カラヴァッジョ 聖マトイの召命



カラヴァッジョ [聖マトイと天使 (第1作)]
1602年 (第2次世界大戦の際焼失)
油彩 画布 232.0 cm×183.0 cm
ベルリン: カイザー・フリードリッヒ美術館



カラヴァッジョ
[聖マトイと天使 (第2作)]
1602年